
羽ばたけなかった翼

一条 灯夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羽ばたけなかった翼

【Nコード】

N7936T

【作者名】

一条 灯夜

【あらすじ】

終戦の日。未完成の橘花の前に、一人の男がいた。彼は橘花設計に関った技術者の一人であり、その胸には複雑な思いが去来していた。

極端に窓の少ない倉庫内部で、組み立て途中の機体を一人の男が見ていた。

それは空襲を避けて設立された工廠で、広く開け放ったドアから入る夏の日差しさえ、その内部の全てを照らせてはいなかった。

日本発のジェット機は、間に合わなかったのだ。

背後に広がる町並みには所々に瓦礫が散らばり、黒煙をたなびかせている。話し声は、さっきのラジオ放送以降、消えた。どこからか獣が慟哭するような声が響く。

橘花の前に立つ男に、涙は無かった。

虚しさだけが、その男の心の中にあった。

彼の名は、藤村 孝之。

橘花の開発に関った一人であった。

——大東亜戦争末期。

あらゆる物資が不足した中で、海軍の要請という形で橘花の開発は始まった。独逸よりもたらされた資料は、輸送中に失われた。輸送を担当した伊号潜水艦が撃沈され、本土に届かなかったのだ。しかしながら潜水艦とは別に、日本領のパリクパパンより一人の将校が少数の資料を手に航空便で日本へと帰りついたため、全ての情報の損失は避けられていた。

ごく僅かな資料を基に、松根油を混ぜた低い質の燃料や、劣悪な潤滑剤でも高速を出す可能性のある新型機の開発が中島飛行機によ

って行われていた。

製作所の廊下を藤村は歩いていた。

新しい発動機となる部品の開発を続ける彼に、ここ数週間まともな休息は無く、目の下には隈が痣の様に深く刻まれている。独逸からもたらされたタービンロケットの資料には、その心臓部の図面が欠落していたのが彼の仕事を倍加させていた。……いや、彼に限らず、全ての技術者に休みは足りていなかった。

敵国の後塵を拝する技術力を、彼らは気力だけで乗り越えようと奮闘していたのだ。

「入りました」

低くしわがれた声で、返事が返って来た。

その声を聞いてから、彼は扉を開けた。簡素な部屋には、床に直置きで本が山のように詰まれ、窓に背を向けるようにしておかれた木の机に、中年の男性が座っていた。逆光の中で、その中年の男性の表情までは藤村には見えなかったが、痩せ過ぎの線の細さはくつきりと見えた。その中年の男性こそ、藤村の部署の班長を勤める男だった。

「やはり推力が足りません。独逸からのタービンロケットの図面を失くしたのが、致命的の様です。全装時の離陸の補助として、火薬を使用した推進装置を付けるのが最良と判断されました」

藤村は感情を押し殺し、努めて事務的に報告した。

「ご苦労。上手く行きそうか？」

机の上の本から目を離さずに、班長が尋ねる。

「日本式のタービンロケットは必ず飛ぶでしょう。しかし……」

藤村はそこで言葉を飲み込んだ。言うつもりではなかった一言が、口を出ようとしていたのだ。

だがそれは、開発に関する技術者の多くが気付いていることでもあった。

「言いたまえ」

読んでいた本から顔を上げ、班長は真つ直ぐに藤村を見た。穏やかだが凄みのある視線が、藤村を射抜く。

だが藤村は、それを恐ろしいとは思わなかった。

「固定機銃は無い、最大で800kgの爆弾を一発搭載……こんな武装で、切り札になるとでも？」

航空機開発自体への直接的な批判を避け、藤村は非力な武装について問いかけた。

「高速機の一撃離脱だ。半端に兵装を増やしても速度は出んよ」

なんだそんなことか、とでも言いたげな様子で、班長は答えた。

それが藤村には腹立たしかった。一式戦闘機の開発にも関わったこの班長が、そんな兵学校出の益暗士官の様な知見をさらすことに、藤村は憤っていた。

「性能は……銀河のやや上止まりでしょう。整備も容易ではない。決定打には……」

「ネ・12の改良は今も進んでいる。大丈夫だ」

藤村の言葉を遮って、班長は尚も冷たく言った。

「本当にそんなことを思っているのですか？」

不満を隠さずに言った藤村。

班長は答えなかった。

それが、何よりの答えだった。

彼を責めるべきでないことは、藤村にも十分理解している。それでも言わずには、居られなかったのだ。班長ならあるいは、そんな思いも藤村の中にはあったのだし。

今でこそ軍部の意向を傾聴する班長だが、それでも数多くの軍用機的设计に関った、天才技術者の一人なのだ。

沈黙から逃れるように「失礼します」と言っ、藤村は退室した。廊下の空気は重、淀んでいる。その中で、無数の人間が蠢く気配だけがある。怒鳴り声がするのは、海軍幹部が来た時か、軍部からの連絡を受け取った時だけで、平時には考えすぎて熱のこもった頭のまま、皆ぼそぼそと話すからだ。

製図室を覗いたが、中は無人だったので、藤村は実験室へと足を向けた。

一つ階段を下った先にある実験室では、六人の男が車座になって、何かを見ていた。

「調子は？」

そう声を掛けて、藤村が列に割り込んだ。

「見てくれよ」

車よりやや小さいくらいの大きな筒状のタービンロケット、ネー・12の改良試作型が分解されていた。取り出されたタービンの羽が、熱で溶けて変形していた。

「熱に保たないか」

藤村が呟くように言った。

「他の鋼材を当たってみないと」

藤村の横に居た男が、これまで試した鋼材を記したノートを開きながら言った。耐熱合金の素材も無いから、期待は薄いのは誰もが知っていたが、誰一人として諦めている者はいなかった。

「工作機械も、大分いかれて来たからな」

しゃがみこんで、改良型ネー・12を弄りながら、もう一人の男が言う。

「質の良い外国産の機械だ、日本の代替部品で動かすのも限りはある」

ノートを見ていた男は、呟く様に言った。

その時既に、日本は満身創痍だった。機体を開発するための部品は足りず、電力も足り無い。工場の職人は、発注源の軍隊に持っていかれる。せっかく開発した機体ですら、数を確保するために工程も部品も減らして性能を落としている。

九州からは連日沖縄に特攻隊が出撃し、一億総特攻の文字も新聞に踊った。

こんなことをする様では、もう日本は駄目だ。
誰の目にもそれは明らかなのに、誰もそれを是正出来ずにいる。

制空権、制海権を失った日本は、終戦の展望を見出せずに、日毎に犠牲者を増やしていった。

そんな中においても橘花の開発は進み、季節は夏になった。

初期試料が到着してから約一年にも及ぶ血の滲む様な努力と、幾度もの試作の中で、ついに新型機は飛ぶための全ての機能を獲得していた。

そのタービンロケット機の名が『橘花』だと藤村が知ったのは、八月の最終試験を終えた時だった。機体の名前に『花』がつけられるということは、特別攻撃機ということになる。こういった情報は本来秘匿されていたが、タービンロケットの流用のための情報共有により、海軍廠の技師から伝えられたその話は、ひっそりと技術者の間に広まっていた。

だから、なのだろう。完成し試験を終えた機体を分解し、木更津基地に送ったその足で、藤村は班長に会いに行つたのは。

「特攻に使うのですね」

荒い息で、殺気すら滲ませ藤村は言った。

「今月十日に陸海軍幹部が視察に来る」

藤村の尋常ならざる気配は明らかなのに、それでも班長は冷静だった。彼は直接的に答えず、軍部の視察結果によることを暗に藤村に言うに留めた。明確な言及を避けることで、藤村を落ち着かせようとしたのだ。あるいは、同じ様な憤りを感じている自分自身を。「技術者として、納得できません」

藤村は、尚も食い下がった。彼はこの時、軍部への直訴すら考えていた。日に何千人と戦死している中で、たった数十機の特攻がそれほど重大とは思われなくなりつつあった時勢。それでも藤村は、そんな兵器の開発に手を貸したく無かった。

彼にとってそれは、技術者の名折れという名誉の問題だけでは無い。天皇の名の下に喜んで死ぬ、なんて言われた所で、納得できるはずが無い。誰もが恐怖と悲しみの中で、歯を食い縛って死ぬために飛ぶのだ。自分なりの大切な者を想いながら。

自分が作ったものが、誰かの大切な人を奪うのだ。

そしていつか、自分も戦死者の一人になるのだ。

藤村の中に恐怖があった、怒りがあった、悲しみがあった。その衝動が、彼の胸の内で暴れていた。

「敵艦への水平ないし、緩降下爆撃を行うと聞いている」

溜息をつくように言った班長に、藤村は即座に「？だ！」と叫んだ。

「大声を出すな」

そんな班長の声は、最早藤村には届いてはいなかった。

「現状を全く見ない大本営こそ非国民だ！ 戦争責任を擦り付け合う屑の寄せ集めだ！ そんな連中の言い分を聞いてやる義理がどこにあるんですか！」

これまでの鬱憤をぶちまける様に、藤村は捲し立てた。

「ならば！ 国際法に違反し、民間人を空爆で虐殺する英米に降伏しろというのか」

その藤村の言葉を待って、班長は声を荒げた。軍需工場で無く、民間人を標的とした焼夷弾による市街地爆撃に、班長は激しい怒りを持っていたのだ。

そんな班長を、藤村は初めて見た。藤村が捉えていた班長の人物像とは、寡黙で冷静で……藤村の様な若い技術者の抗議には、のらくらした言い回しで逃げる、そんな老獪さも備えた人だと思っていた。

決して、感情をあらわにすることなど無い人だと、藤村は思っていた。

「先日広島に落とされたのは原子爆弾だろう。手をこまねいていれば、あれをB29が日本全土に落とすだろう。無辜の女子供までも

殺す奴等に、降伏しろと貴様は言うのか！」

藤村の戸惑いを余所に、班長は続けた。一度溢れた感情は、容易く止められるものではない。これまでの胸の内を吐露する様に、藤村以上の絶望と呼ぶに近い心情の全てを班長は叫んでいた。連合軍の手法を憎みながらも、それを打ち倒す戦闘機を作れない自分自身への怒り絶望を。

「どうなんだ！ 答える！」

「やり方が間違っています！」

泣きそうになりながら、尚も藤村は反論した。

「まだ言うか！」

班長は、そう言つて藤村を殴った。

藤村はその衝撃で横に倒れた。班長の力が強かったわけではない、藤村の疲労は深く、そして殴られた驚きが勝つて足の踏ん張りを利かなくしていた。

そんな藤村を見て班長は俯き、そして何も言わずに去つていった。

戦争が終わつたのは、その十日後だった。

天候不順に空襲……延期に延期を重ねることとなつた橘花の試験飛行は、軽加重での飛行に成功した。だが、本番となる軍幹部の視察における燃料を満載しての試験において、離陸に失敗し、その機体修理中のことだった。

なぜ、こんなにも殺したんだ。

それは戦争を始めた東条内閣にも、速やかな終戦に導けなかったその後の内閣にも、赤紙を連発し特攻を強要した大本営の軍幹部にも、無辜の市民を殺した連合軍にも、全てに抱いている感情だった。だからかもしれない。藤村が敗戦を聞き、組み立て中だった試験量産中の橘花を壊そうと思つたのは。置き去りにされたままの金槌を手に取り、大きく振り上げる。だが、それを降ろせずにいた。

心血を注いだ橘花を、惜しむ気持ちは確かにあったが、それだけではない。三流の工業国と言われた日本の技術は、確かにタービンロケットを飛ばしたのだ。

それだけの力が、確かにあるのだ。

敗北は一つの結果であり、受け止めなくてはならない。だが、全てが失われたわけではない。生き残ってしまった者として、これらの日本を再び飛翔させる使命がある。

この技術は、もう一度日本が立ち上げるためのものになる。
そう信じて、藤村は金槌を投げ捨て、橘花を仰ぎ見た。

（後書き）

主人公は架空の人物としました。

それ以外は、概ね歴史的事実を元にストーリーを組んでいます。

尚、注意点といたしまして『タービンロケット』は、当時『ジェットエンジン』を指す言葉であり、ロケットエンジンとは別の物でありますことをここに記させていただきます。

さて、シリーズとして登録した『風と翼』シリーズですが、第二次世界大戦期の空を巡る戦いを、一話独立の短編として書いていくつもりです。

当初、搭乗員の戦いを『風』シリーズとして書いていこうと思いましたが、当時工業力に劣ると言われた日本において、技術力という戦いを続けた技術者も同様に空で戦っていたエースであると思い、その物語を『翼』とし、『風と翼』シリーズとして両者の戦いを書いていこうと思いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7936t/>

羽ばたけなかった翼

2011年6月3日22時11分発行